

## 創造性を育てる学習指導の方略

創造性を高める教育は、いつの時代でも強調されてきたが、とくに、情報化社会といわれる現代社会においては人間性を回復して、その子なりの個性を発揮し創造的に適応していく人間性の育成がたいせつになってくる。

ところで、創造性の核心は知性とよばれる思考力にある。しかし、知性は単独でみがかれるものではなく、性格、意欲、態度などに支えられている。すなわち、知性の実現は主体性が母体となる。わたしたちは、「主体的学習」を提唱し、昭和38年から3か年間の実践的研究の成果を著書『主体性を育てる学習過程』（1966年4月、明治図書）としてまとめたものである。

その主体性も結局は知性によってみがかれる。知性を核にしながら相互に働きあひみがきあって創造性が高まっていくのである。すなわち創造性は主体性の純粋なあらわれである。そこで、主体的学習の深化・発展を求めて、昭和41年から創造性の教育へと研究を深め、著書『主体性から創造性への学習過程』（1969年6月、明治図書）としてまとめ多くの批判をあおいできたのである。

これから6か年の研究をふまえ、昭和44年から、子どもたちひとりひとりに着目し、創造性を育てる研究をさらに鋭角的に深めてきた。とくに、人間の情的存在に着目し、学習過程で、先行経験や教師の発言・提示される事象や資料・板書・友だちの意見などが、その子の問題解決の手がかり、すなわち情報として生かされるような指導方略を求めてきたのである。わたしたちが、学習指導法をとくに指導方略としたのは、ひとりひとりの子どもの特性を軸にして、教材内容と指導方法とを最適に一体化するような営みを願ったからである。

指導方略の構想として、とくに次のようなことに留意してきた。

- ・創造力とはひと口でいえば新しい「構造」を見出すことである。そこで、問題意識をもって効率のよい構造が追求できる学習過程はどうあるべきか。
- ・情報を階層的に生かせるような教材の構造はどうあるべきか。
- ・学習のそれぞれの場で、どのような思考過程を通して情報を階層的に生かさせるか。
- ・自らが学ぶ学習方略や自分の舵にゆだねるフィードバックの効果を生かした学習過程はどうあるべきか。

このような立場から3か年にわたって、きめ細やかな授業研究を展開してきた。そして、「問題発見から、発展する問題発見」という階層を強調した。三層三段階の学習過程や、その指導方略を生み出したのである。

以上『創造性を育てる学習指導の方略』へと発展してきた経緯と研究の角度を述べてきたのであるが、これらは体制化されなくてはならない。すなわち、お互いに関連しながらいくつかの原理によって総合されなくてはならない。それを理論的に解明したのが、第Ⅰ章、第Ⅱ章である。とくに、この理論編は本校での研究の成果だけでなく創造的知性をみがいていく指導の原則をかなり一般的立場から述べている。

学習指導は複雑な構造をもっているため、多くの問題に悩んだのであるが、現段階において、各教科で到達した研究結果をまとめたものが第Ⅲ章である。さらに、各教科編を第Ⅳ章に述べている。

なお、まだ理論と実践とのずれや、未熟な点、不備な点も少なくないので、多くの研究家・実践家の率直なご批判を賜りたいと思う。

この研究を進めるにあたって、本学の林昌三助教授・江淵一公助教授をはじめ多数の方々のひとかたならぬご指導を賜ったことに対して深く感謝の意を表したい。

また、本書の出版を快く引き受けてくださった明治図書、とくに編集部の江部満氏・樋口雅子氏に対して厚くお礼を申しあげる次第である。

昭和47年3月  
福岡教育大学附属久留米小学校  
校長 近沢 克己